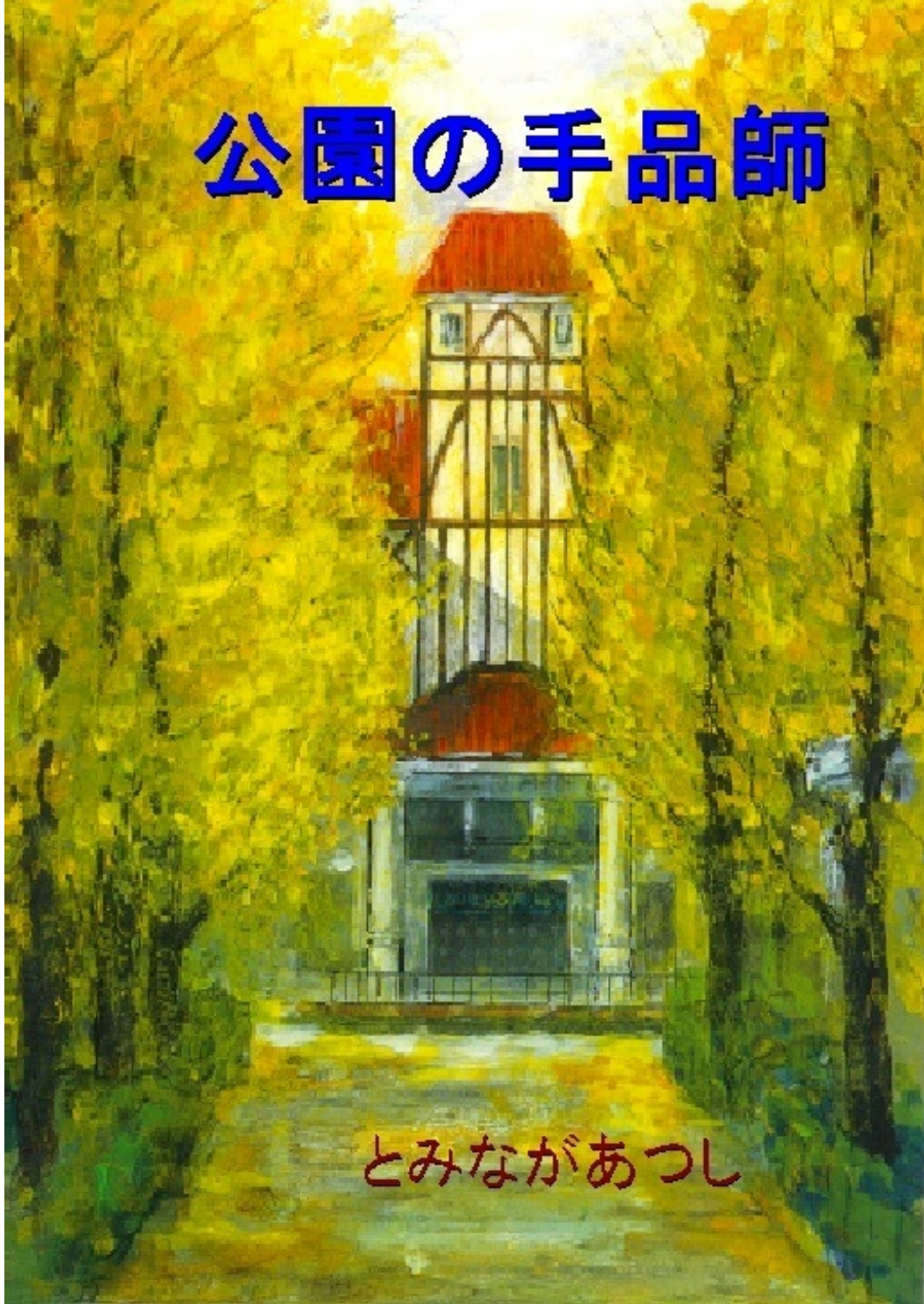


公園の手品師



とみながあつし

二〇〇五年の十月もそろそろ終わろうとしていた。月末の金曜昼下がり、ぼくは御徒町で電車を降り、多様な人種の外人たちの姿が目立つアメヤ横町を通りぬけ、上野のお山にのぼっていった。ちょうど昼休みの時刻だった。しかし、公園にはさほど多くのひと影はなかった。西郷さんの銅像のまえあたりも、ベンチにわずかながら空席があった。ホームレスらしい老人がひとり、固い椅子のうえに身を横たえて昼寝していた。

真昼の時間がもうげに過ぎていく上野の山一帯を、秋冬の時期のにぶい陽光がゆつたりと照らしていた。クルマの往来で騒がしい坂下から吹き上げてくる風は、結構つめたかった。イチョウはやつとすこしばかり色づきはじめていたところだったが、茶褐色に変色したプラタナスの落葉が風に追いついて、右往左往忙しく路上を動きまわっていた。

犬を連れて西郷隆盛の銅像を見るのは、ひさしぶりのことだった。あの大きな目玉でおなじみの風貌は、ほんとうは本人の生き写とはいえないという話を、まえに聞いたことがあった。日本史の教科書などにもよく載っている肖像も、じつは来日したイタリア人のある画家が想像力を發揮して描いたものだけそうだった。

明治の初年に没した本人の写真はのこっていないため、弟の西郷従道の写真をもとにして、聞きづつの特徴を加味して作り上げられたものだということだ。兄弟かならずしもよく似ているとはかぎらないから、はたしてどこまで実像にちかいかいのものか、かなり疑問の余地がある。伝聞によれば、明治三十年高村光太郎の父、木彫家高村光雲の手になる彫像の除幕式のさい、臨席していた夫人は、布が外れて西郷さんの雄姿があらわれたとき、「こげなおひとではなか」と小声でつぶやいたことだ。

今日は大学時代の同級生仲間のクラス会を上野のお山でひらくことになっている。はたして何人参加してくれるだろうか。幹事のひとりとしていえば、すでに二十一人分の用意の申し込みをしている関係で、当日きゆうに何人もが欠席ということになると、収支の具合に妥調をきたし、足がでることにもなりかねない。おおくが年金暮らしの老人仲間、六千円の会費のうえにさらに余分の追徴は憚られるところだからだ。

じつは、会場をさいしよは上野精養軒にしようかということだ。過日幹事役三名で昼飯を試みに寄ってみた。八月友人の藤沢古葉さんが出展している絵画展にいった折り、クラス会の会場探しの第一候補として訪ねてみたというわけだ。しかし、部屋をとるとなると、一人当たり一万五千円ほどの出費を覚悟しなければならず、値段の点でもこちらが考えている条件にあわないことがわかった。そこで、女性たちに人気があるというすぐ近くの懐石料理の韻松亭に切り替えることにしたという次第だ。

そこで、例年定番の趣向をすこしかえて、今年度のクラス会は夫人同伴歓迎ということにしようという話がまとまった。そのむねの案内状をだすことにきめ、印刷の作業は、後日幹事のひとりA君のお宅でやることになった。今年までは永年幹事のS君に何から何までお世話をかけていた。日時、会場の選定・予約、名簿更新、案内状の発送、出欠の確認。五十名ちかくの同級生たちに連絡し、返事を回収する手間と苦労は、じつさいにその作業を体験した者でなければ、わからないであろう。まさにS君の献身のおかげで、毎年クラス会をひらくことができたというわけだ。

一時二十分ほどまえにぼくは料亭に足をはこんだ。ちょうど昼食のかきいれどきで、まだ部屋が詰まっているとのことだ。「もうすこしお待ちください」と、けんもほろろの応対で、仕方なく店のまえの道端で時間をつぶすことにした。道端ではまだ年の若いおとこがひとり、みちゆくひとに駆け出しとおぼしき素人くさい大道芸を披露していた。首質のわるいラジカセでお囃子をながしながら、まりを傘のうえでころがすおなじみの芸を試みていた。修学旅

行生らしい生徒たちが、ものめずらしげに足をとめて、若者のまわりをとりかこんでいた。これも江戸の昔の下町界隈、名残の上野のお山でこそ見られる風情といふべきものであろう。予定の時刻よりすこしおくれ、窓のすぐまえに松の古木が思う存分に枝を広げているひろびろとした二階の奥座敷で、クラス会が始まった。富山在住のT君夫妻も東北旅行の帰りがけの道すがらということで、参加してくれた。数年まえに重病をわずらったS君の夫人も出席してくださった。しかし、今年には四名もの級友たちが他界している。例年になく多い人数だ。そういえば毎年出席していたY君の顔も見えない。どうした訳か気がかりに思えるところだ。月日の経過のなかで、しだいに同世代の友人たちが目の前からぼつりぼつりと姿を消していくのは、さびしいかぎりだ。

第二章

会費徴収の仕事もあるので、ぼくは広間のいちばんはずれの縁側に接したあたりに座ることにした。かつてテレビの人気ドラマの演出・製作で手腕を発揮したA君が空いていた前の席に腰をおろした。かれは四国宇和島の出身で、かれの実家は旧城下町で一二を誇る「はなや」という老舗の旅館をいとなんでいたそうだ。ここ上野の山は、かつて幕府側の彰義隊が官軍と一線を交えた古戦場ということ、会食のあいまのA君との話のやりとりは、幕末・明治初年のころの出来事におよんだ。

得てして世に流布している「歴史」というものは、勝者側のイデオロギーや教化的宣伝臭の沁みこんだものが大半で、ほんとうの史実を伝えているものではないといふべきであろう。とりわけ戦前・戦中の時代に、小学校や中学校で、ぼくらの世代が学ばされ、叩き込まれた国定教科書による歴史教育は、天皇崇拜と国家主義・民族主義の忠君愛國的皇国史観に貫かれたものだった。したがって、彰義隊の悲劇も朝廷に弓ひく朝敵・賊軍のさいごのわるあがきとしてしか教えられなかったように記憶している。

圧倒的な戦力の薩長中心の官軍の攻撃によつて、一日たらずの戦闘で彰義隊は敗退する。連合部隊の指揮をとつたのは、長州の大村益次郎であったという。かれの銅像は、靖国神社の入り口ちかくにいまも存在している。

一方、当時は薩長連合の中核を占めていた西郷隆盛のほうは、のちに西南の役の末、明治政府に反抗した反逆者ということで、戊辰戦争に勝利した明治政府によつて明治二年建立された国営の東京招魂社のちの靖国神社には祀られることがなかったという。九段上の勝者大村益次郎対敗者西郷隆盛、さらには彰義隊の面々。権力をめぐる争いの歴史の結末は、奇つ怪で皮肉な姿を今にとどめている。

戦争という事件の背後には、多くのばあい直接的な戦闘とはべつに、いかがわしく、みにくい諜報謀略活動がつきものようだ。將軍徳川慶喜が大政奉還後、恭順の意思をしめすため水戸に謹慎・蟄居することになったゆえに、主をうしなった無血開城後の江戸は、不安定な社会状態に陥った。文化的にはかなりたちおくれれている薩長の田舎さむらいたちのわがもの顔の振る舞いは、江戸っ子たちの軋壁をかうことになったことは、想像にかたくな。江戸の市民たちのあいだでは、心情的には長年慣れしんだ支配者たる徳川の公方様側に傾斜している向きが多かったものといえるだろう。

武力では勝利していても、まだ精神上のヘゲモニーを獲得できていないわけではない。そこで、薩長側のもちいた手段は、薩摩の特殊部隊・御用盗を動員して、江戸の各所に火を放ち、略奪や殺傷を重ねながら、それらが江戸の治安を担当していた彰義隊の仕業だというデマをふりまいて、社会的秩序の混乱と不安、反感、不信をかきたてたる作戦だった。戦国時代の城取にもいられた人心攪乱と離反、謀略の古典的戦法だ。真実を知るよしもない江戸の庶民の公方様寄りの心理をひき裂き、彰義隊を孤立化させる策謀は、まんまと図にあたることになったようだ。

かくて上野の彰義隊は、いまでいう「守旧派の抵抗勢力」の代表格として、一八六八年五月一日未明以降わずか半日の会戦によって、本郷の高台からアームストロング砲の集中砲火をあびせられ、必死の防戦あえなく木っ端みじん粉砕・壊滅させられてしまうことになった。朝敵である賊軍側の戦死者の遺骸は放置されたままで、弔うことも禁じられたのとどだ。いいわるいは別にしておいて、戦闘をまじえた相手にたいする勝利者側のこうした冷酷・無惨な報復が「敗戦」のきびしい現実の習いというものだろう。義を彰らかにしようとして義に殉じた彰義隊の戦没者の墓碑は、同類の反逆者、西郷隆盛の銅像の裏手に、いまはひっそりとのこされている。

攻める側二万、守る側三千弱。勝敗の帰趨は、戦闘のはじまるまえから明白である。しかも、防衛陣地としては、地勢的にも適当とは思えない裸同然の上野のお山に、なぜ彰義隊は布陣したのか、まえまえから不審に思えていた。地理に通じ勝手の知れた江戸市中で、市民をまきこんだゲリラ戦をしかけたほうが、効果的な戦法であるはずなのだが、義を建前とする彰義隊は、あえて町人たちの人命や財産を犠牲にすることをよしとしなかったのだろうか……。じつは、東京国立博物館の後は、いまでも家光以降の徳川家歴代の墓所があり、寛永寺が將軍の祈願所として徳川にとっては由緒ある聖地でもあったことが、立てこもりの拠点に上野のお山が選ばれたおもしろい理由であったようだ。

第三章

芭蕉が四四歳のころに詠んだといわれる有名な句に、「花の雲 鐘は上野か 浅草か」というのがある。芭蕉は当時深川に住んでいたようだから、距離的にみて、聞こえていた鐘はたぶん浅草寺からのものだったと想像される。しかし、あるいは風向き加減の具合で上野寛永寺の鐘の音がとどくこともあったのかもしれない。

韻松亭が創建されたのは、明治八年のことだという。まさにすぐ脇の上野の鐘の音が松木立にひびきわたるところから、韻松亭の名がつけられたそうだ。寛永年代に徳川家光によって建立されたといわれる寛永寺の中心をなす中堂の大伽藍は、上野公園のほぼ中央、現在の大噴水のあたりにあったようだが、彰義隊との合戦のうちに薩長軍の砲火をあびて焼失してしまった。しかし、鐘楼は焼けのこって、その後も鐘の音が上野の山から鳴り渡りつづけたようだ。

ぼくらが予約した韻松亭の昼食は、「花いかだ」という三千七百八十円の会席料理だった。酒代や諸経費をふくめて、会費六千円でまかなうには、それ以上高いものを注文するわけにはいかなかった。生麩の串焼きや生湯葉の刺身など、どれも少量で、上品・淡泊な薄味で、ポリウムのあるこつてりした肉料理好きにはいささかも足りないような献立だった。しかし、どこかに持病をかかえた高齢者たちには、健康上適当な馳走というべきものである。そもそもだれしもの舌を満足させるような料理を探すことなどは、到底かなわぬ注文というほかあるまい。

ところで、ここ上野の山には、これまでも展覧会や音楽会の催しの度ごとに、何十回となく足をこんでいきている。だが、ついぞこれまでは、まともの上野という地名について考えてみることはなかった。上野駅から上越線が上野・上野(こうずけ)方面に通じているので、たぶんその上野と関連があるのだろうぐらいにしか思っていなかった。しかし、その思いこみはまちがいであったことを、最近知ることができた。上野の上野は、群馬県の上野・上州とはまったく関係なく、はるか遠い伊賀の上野に由来しているのだそう。

動物園のなかにいまでも藤堂家の墓があるとかで、じつはこの一郭は江戸時代初期には藤堂家の江戸屋敷であったとのことだ。かの戦国大名藤堂高虎は築城術にたけていて、各地にすぐれた城を築いたようだ。高虎は最初秀吉に仕えて、伊予板島(宇和島)七万石の領主とな

り、丸串城を築いた。その点で宇和島が故郷であるA君とは関わりがあったわけだ。

関が原の戦いでは東軍につき、今治二十万石、徳川のもとでさらに伊勢津二十二万石の藩主となり、津に居城をかまえたが、近隣の伊賀上野にも世に知れた名城を造営したそう。その上野の名前が、かれの江戸屋敷あたりの地名になったらしい。屋敷に接して菩提寺寒松院が建立され、高虎は没後ここ上野寛永寺輪王殿裏手に埋葬されたという話だ。寒松院の名称からもわかるように、いずれにせよこのあたりの高台には、古くから見事な枝ぶりの松が茂っていたことが察しられるところだ。

ところで、A君ゆかりの四国で、幕末に勇名をとどろかせた人物といえば、なんといっても土佐の武士瑞山(半平太)と坂本龍馬のふたりがあげられるであろう。とくに龍馬については、世間ではかなりの人気があって、若者のあいだでは、尊敬する人物の筆頭にあげられることもあるほどのもてかたのようだ。司馬遼太郎の小説や、それにもとづくテレビドラマや映画などの影響が大きく作用しているように思われる。つまり、「司馬史観」によって色づけられ、もちあげられた、颯爽とした「竜馬」のヒーロー像が、一種のロマン・夢物語として世にうけいれられているということだろう。

龍馬については、むしろその実像や客観的事績に迫ろうとする学術研究や資料収集もさかんにおこなわれていて、おびただしい出版物がだされてはいるが、いったん世に流布した痛快で聞こえのよい「竜馬」のイメージのひとり歩きは、容易に変わることはないであろう。かたや堅苦しい義よりも、現実的な理や利を未来にむかって追いもとめた坂本龍馬、かたや代々にわたってうけた恩義に報いんがため、生死をかけてみずからの本分を追求した彰義隊の隊士たち、まさに対蹠的なありようといえるだろう。

しかし、ぼくは幕末から明治にかけて名をなした愛国の「志士」とよばれている人たちの行跡や人物像については、かなりの疑問をいだいている。勝者による「勝てば官軍」式の歴史の脚色、みずからに都合のよい粉飾が加えられているように思えてならないからだ。

第四章

ぼくの知りあいに、武市瑞山の子孫だという武市姓のひとがいる。武市半平太は獄中で断罪・切腹。こどもはいなかったようだから、直接血はつながっていないのかもしれない。ただ年端もいかぬかれの弟も、おなじ獄内に囚われの身となっていた。拷問に屈して同志の秘密をもらしてしまうおそれがあるということで、瑞山は獄吏に手をまわして実弟に毒をのまして絶命させるよう細工する。同様に、「人斬り以蔵」の名で知られていた、瑞山門下の岡田以蔵にたいしても、節操上問題があり、裏切る懸念があるということで、毒殺をくわだてるが、失敗におわる。しかし、予想は的中。以蔵の自白を重要証拠として、文久二年(一八六二年)におこなわれた土佐藩の重役、吉田東洋暗殺謀議・実行の主犯として、半平太は断罪されることになる。

学識ゆたかな吉田東洋は、藩主によって重職に登用され、門閥政治の打破や経済統制の政策など穏健な藩政改革案を立案して、実行にうつそうとしていたといわれる。また藩主山内容堂同様、公武合体推進の立場にたっていたともいうことだ。ただちに尊皇の精神を体現して藩政を一新し、倒幕へ向かおうとしない方策が、瑞山には気にいらなかったようだ。しかし、意見のちがうみずから藩の要人を、刀の力にまかせで抹殺するやりかたは、短慮すぎる暴力行使であって、罪に問われてもいたしかたあるまい。

容姿端麗な瑞山がモデルになっているといわれる芝居の長州出の月形半平太は、京都の花街で浮き名をながし、艶聞にことかかぬイケメンの粹人のように脚色されているが、ほんものの土佐の半平太のほうは、きわめて高潔な人柄で、まじめすぎるほどまじめな人物であったことはまちがいないようだ。しかし、土佐勤皇党をたちあげ、フアナティックな天皇崇拜思想によって、異なる立場・信条のひとびとや反対派を、以蔵たちをはじめとする同志のもの

のを「刺客」に使って、京都その他の地で、つぎつぎと謀殺していったやりかたは、「テロ」以外のなものでもないといわざるをえない。今日からみれば、かれらは志士といえは聞かえがいいが、じつさいは天誅と称して暗殺をくりかえす、目的のためには手段をえらばないテロリスト過激集団だったとみなすほかあるまい。

さらに、たしかにじぶんたちの計画や運動の内実や同志の所在を暴露されるのは、集団・組織にとつて由々しいことではあるが、じつの弟や以前からの側近の門弟仲間を、秘密をもちらすかもしれないということ、内部において葬り去り、命を奪い、「消す」というやりかたは、あまりにもおぞましい行為である。いくら苦渋の選択とはいえ、みずからの盲信的なところざし実現のため、身内の人間までの殺害をあえて行うということは、政治の次元での是非は別として、人間本来のありようとしていかなるものであろうか。

明治以降の日本では、非常・緊急のばあいには、味方の犠牲もやむなしという発想は、あらためられることなく軍隊にもひきつがれていくことになる。太平洋戦争沖繩戦の折り、陸軍の部隊が一般の住民や女子生徒たちの生命や安全を守るのではなく、足手纏いや、情報漏洩、スパイへの利用のおそれがあるということで、死においやつた事例は、志士たちの動向と重なるものがあるように思える。また、太平洋戦争における特攻隊の決死攻撃は、遺憾ながら現在世界を揺るがしている自爆テロの精神的原型であるともいえるのではないだろうか。

「カミカゼ」は軍事作戦であり、自爆テロは政治的犯罪行為だとして、特攻隊を擁護しようとする意見もあるようだが、いずれにしても自分の命を代償にして目的をとげようとする自爆・自殺行為は、けつして「美しい」などとして称揚されるべきものとは思えない。

坂本龍馬のほうは、武市瑞山にくらべれば、片意地をはずすに、もつとフレキシブルに事に即応するもちまへの陽性の性格が、好感をもたれるゆえんなのかかもしれないが、筋目はずれて、糸の切れた凧のようにどこぞに飛んでいってしまうのか、はたには容易に予測できない危うさを感じさせるものがある。名うての大風呂敷をひろげて、つぎつぎと新しい構想をうちあげ、あちらこちらをとりまわって、みずから夢みる事業の実現に奔走する。

一八六五年に長崎で私設の海軍のちの海援隊を創設しようとの企画もそのひとつで、宇和島藩の隣の大洲藩に船の購入費用を立て替えさせ、実際はみずからがもつぱら物産品の輸送に使用して、回船で利益をあげようとした大洲藩の重役たちの思惑を出し抜く結果になったようだ。いわば龍馬はから約束でまんまと多額の資金をせしめ、他に犠牲を押し付けることを、平然とやってのけたというわけだ。ひとの禰で相撲をとる、自己本位でおもいがつた「志士」の裏の顔が透けて見える気がする。

ぼくが興味をおぼえるのは、もし龍馬が京都近江屋で殺されずに、明治時代に生きのこっていたらどういうことになっていたかという仮定の話だ。だれが龍馬襲撃・殺害の犯人かという点についても、諸説がいろいろみだれているようだ。すくなくとも、新撰組ではなかったよう、京都所司代配下の見回組犯行説が、現在ほもっとも有力のようだ。なかには薩摩藩の侍たちだったのではないかとの説すらあるよう、真相はいまだに藪のなかとことであるらしい。

薩長なかでも長州吉田松陰の「一君万民」論に染まった連中に主導された、天皇を頂点とする中央集権的な明治政府の軍事・官僚国家建設に、龍馬は思想的にも体質的にも、なじめたとはいえにくい。おそらく、いずれは疎外されるか、かれ自身そうした上からの締め付けから離脱することにならざるをえなかったであろう。むしろ、海外事情に通じていた龍馬は、かつて土佐藩を脱藩したように、こんどは日本を脱国・脱出して欧米かそれ以外の場所へ、交易や商業活動などの分野で思う存分の働きをしたのではないだろうか。さもなければ、国内において官憲によつて、やはり既定の枠からはみだす危険な人物として葬りさられることになった可能性がおおきかったように思われる。

明治時代以来、長州は中央政界で錚々たる有力リーダーを輩出している。しかし、かれら

の多くには、なみなみならぬ権力志向がひめられているように思えてならない。その傾向は、体制側ばかりではなく、反体制側にも共通しているような気がする。徳田球一亡きあと、共産党の最高幹部となったひとびとのなかにも、旧長州・山口出身者が名を連ねている。山口県光市出身の宮本顕治(松岡洋右と同郷)、門司生まれで萩育ちの志賀義雄、おなじく生家は萩の商家だという野坂参三。もちろん、長州藩士の血をひく岸信介・佐藤栄作兄弟やその子孫をふくめて、それぞれは有能な人物ゆえにリーダーたりえたものではあるが、根底にはそれだけでない精神風土が作用しているのではないだろうか……。

三時すぎ、クラス会は散会となった。めでたく、経費は不足なく支払いを済ますことができた。上野公園の広場のあたりでは、いつものようにたくさんの方々がむらがっていた。ぼくはカラオケで唄うこともある、フランク永井の「公園の手品師」を頭のなかで口ずさみながら、イチヨウの並木道を駅にむかって歩いていった。

「鳩がとびたつ公園の イチヨウは手品師 老いたビエロ

薄れ日に微笑みながら 季節の歌を

ララン ララン 唄っているよ……

秋がゆくんだ冬がくる イチヨウは手品師 老いたビエロ

口上はいわないけれど 慣れた手つきで

ララン ララン カードを撒くよ

呼んでおくれよ幸せを イチヨウは手品師 老いたビエロ……」

ぼくのすこしまえを、M君夫妻が肩ならべて歩いていった。これが元気なM君の最後に見える後ろ姿ならうとは、ぼく想像もしなかった。それから半年ほどして、かれはたまたま感冒で入院中の病院で脳出血をおこし、まったく意識のない状態に陥ってしまった。

(完)